

積極的離床が行えない患者に対する ベッド上エクササイズ実施に関する調査報告

手術や疾病・外傷などにより臥床が強いられた患者に対し、早期回復の観点から早期離床は有効であるが、全身状態不良など様々な要因により早期離床が実施できないケースも経験する。そのようなケースではベッド上でのケア・エクササイズがその後の回復のために重要である。本調査ではベッド上エクササイズに関するアンケート調査を行ったので報告する。

方 法

調査期間：2016年9月10日～2016年9月27日
調査対象：日本離床研究会教育講座の参加者のうち回答の得られた739名

対象職種：看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士

調査方法：質問紙法（配布）

●設問

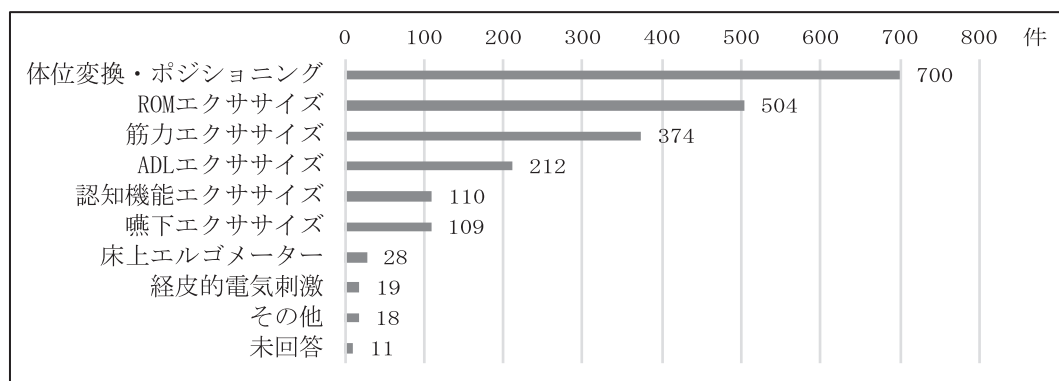
皆さんが離床困難な症例に対してベッド上で行っている介入はありますか？（複数回答可）

●回答選択肢

・体位変換・ポジショニング・ベッド上エルゴメーター・経皮的電気刺激・関節可動域（ROM）エクササイズ・筋力エクササイズ・認知機能エクササイズ・嚥下エクササイズ・ADLエクササイズ・その他

結 果

・ アンケート回収総数 739



ベッド上で行っている介入

考 察

今回、各施設で行われているベッド上での介入について調査した。回答の多かった項目については、臥床による合併症として多い、褥瘡・拘縮の予防や筋力低下防止の目的でよく行われていると考えられる。対して、経皮的電気刺激やベッド上エルゴメーターは少ない回答数であった。しかし、近年の報告¹⁾では、重症患者に対する神経筋電気刺激は筋力維持に有効である可能性を示唆するものや、ベッド上エルゴメーターが重症患者の運動機能維持に有用であるとするものもあり、今後ICUを中心に活用が増加する可能性がある。また、認知機能エクササイズについては、患者の状態が落ち着き、車椅子乗車が可能となってから行うイメージがあるが、嚥下エクササイズと同程度の回答が得られ、早期から介入する施設が増えている印象である。同様に早期の認知機能エクササイズについてÁlvarezら²⁾は、高齢ICU患者に対する作業療法の効果について調査し、認知機能やADLの回復、せん妄の予防などに効果があったと報告している。離床が制限された場合に、褥瘡・拘縮予防以外に色々な介入の引き出しがあると、デコンディショニングを予防し、患者のアウトカム改善につながると考えられる。

文 献

- 1) Dearbhla B et al. An evaluation of neuromuscular electrical stimulation in critical care using the ICF framework: a systematic review and meta-analysis. Clin Respir J.10:407-20, 2016
- 2) Alvarez EA et al. Occupational therapy for delirium management in elderly patients without mechanical ventilation in an intensive care unit: A pilot randomized clinical trial. J Crit Care. 37: 85-90,2016

著者情報：飯田 祥* 黒田智也* 土屋 研人* 曷川 元*
*日本離床研究会 学術研究部

早 期 離 床